



13  
3416

# 曲亭主人著

每編必有是印  
丁亥五著隨弋

ちのけん せん ざい ろく ちん

# 八犬傳第六輯

せんほむろくさのひのとのおれ志んちん

結善院

柳川重信  
溪齋英泉

畫

文溪堂嗣梓



八犬傳第六輯有序



予所著八犬傳一書。此煠夕冬夜戲墨。曩  
謬為書賈山青堂所刊布。雖未足使楮價  
踊貴。而於書賈頗有贏餘焉。且暮以此為  
搖錢樹云。自是之後。屢續稿而至第五輯。  
時山青堂耽於他事。乃不果俛仰之間。光  
陰荏苒。越歷四五年矣。今茲書肆涌泉堂。  
購得前書。刻版又揣刻。一日令山青堂為

八代傳六輯卷一  
人告諸予乞代續梓。誅求數四。得得不已。多爲其言有理。漫然領之。將創餘稿。以充銷夏之料。然無有宿構也。偶其所。有皆忘之矣。因沈吟構思。然後費燈油者。每夜一二盞。漸費至一二升。則稿了一卷。亦費迨斗許之夜。稿了者。總五卷。其多五卷。楮數最多。遂釐之以爲二本。編纂共六本。手稿竟完矣。輒授之于涌泉堂。以登於梨棗。其

書畫二工。依故出像。則柳溪二子。所畫淨書。乃田谷兩筆錄之。閱五六月。而書畫盡成。嗚呼。涌泉堂性太急。自克促工。而無虛日。及蒞人告成。又乞類予之自序於簡端。業在倉卒。際不遑含毫。且回思。即便述本。輯稍久而出世。趣代序以塞其責。文政九年菊月中。澣書于著作堂。雨牕。

曲亭蟬史



南總里見八犬傳第六輯總目錄 本輯全六本 終六十一回

卷	貳	卷	壹
第五十五回	第五十四回	第五十三回	第五十二回
栗飯原滅族里遺犬坂	馬大記 賺言途窮籠山	常武疑囚一大士	高屋暖悖順搏野豬
	品七漫話說奸臣	烟上謬捕犬田	朝谷村舩虫贈古管
		馬加竊奪舩虫	鬼燐助馬導兩婿

三	卷	四	卷	五	卷	下五
第五十六回	第五十七回	第五十八回	第五十九回	第六十回	第六十一回	第六十二回
且開野歌舞暗遺釵兒	對牛樓毛野麀雙	窮阨初解轉遭故人	京鎌倉二犬士憶念四友	胎內寶現八射妖怪	敲柴門離衣訴冤枉	辨故事禮儀告薄命
小文吾諷諫高論舟水	墨田河文吾逐舩	老實續主家報舊憂	下毛州赤岩庚申山紀事	申山窟冤鬼託觸體		

八犬傳六輯卷一

總目錄終



おまき

お侍助友

坂田金平太

早野貞九郎



鈴子

お原田助



お原田助

若葉銀吾

煙路五郎

一六傳六 昇平

角良三 昇平



袖角九念三

千葉五郎

馬加五郎



昇平

犬坂毛野 胤智



渡部綱平

古部多六

いるね



おまき

あべ品七

若葉金十郎

九まろ

角良三 昇平

馬加<sup>ト</sup>大<sup>ト</sup>記<sup>ト</sup>常<sup>ト</sup>武<sup>ト</sup>  
一<sup>ト</sup>所<sup>ト</sup>圖<sup>ト</sup>壯<sup>ト</sup>年<sup>ト</sup>之<sup>ト</sup>像<sup>ト</sup>也

佞似賢者  
巧惑衆愚  
砥硤混玉  
懼紫奪朱

卷一

栗<sup>ト</sup>飯<sup>ト</sup>原<sup>ト</sup>首<sup>ト</sup>胤<sup>ト</sup>度<sup>ト</sup>

萬倍



箭<sup>ト</sup>山<sup>ト</sup>逸<sup>ト</sup>東<sup>ト</sup>太<sup>ト</sup>縁<sup>ト</sup>連<sup>ト</sup>

七  
才<sup>ト</sup>多<sup>ト</sup>能<sup>ト</sup>者<sup>ト</sup>少<sup>ト</sup>才<sup>ト</sup>多<sup>ト</sup>者<sup>ト</sup>  
法<sup>ト</sup>少<sup>ト</sup>者<sup>ト</sup>多<sup>ト</sup>才<sup>ト</sup>多<sup>ト</sup>者<sup>ト</sup>  
母<sup>ト</sup>分<sup>ト</sup>別<sup>ト</sup>  
之<sup>ト</sup>所<sup>ト</sup>也  
乃<sup>ト</sup>松<sup>ト</sup>魚<sup>ト</sup>  
人<sup>ト</sup>之<sup>ト</sup>碑<sup>ト</sup>  
以<sup>ト</sup>名<sup>ト</sup>

卷一

船<sup>ト</sup>虫<sup>ト</sup>

泉





石流をせと  
 あらむと  
 めのえら  
 水  
 沼不抄  
 せ  
 豊  
 斎



豔而節操  
 命薄情篤  
 劈身仆簪  
 返壁瘞玉  
 節  
 婦  
 衣



八代傳水車巻

池見堂

坊賈之捷利素其所也。而猶有甚焉者。若拙著常世物語。三國一夜物語。二書其刻版係于丙寅之燬。或為鳥有或亡其半。曩一賈豎補刻常語之闕。又翻刻一夜語。然不告諸予。乞校訂。擅改易常語書名及出像。而今是如新著。是以多不與舊本同。加之其文誤衍亦多。拙劣不遑毛舉也。初予不知之。客歲涌泉堂購得常語補刻之梓。而乞予校訂。於是予駭嘆久之。無所漏憤。譬如汚衣之油。屢洗乃耗本色。迄今又莫奈之何。且也一夜語翻刻。雖未得見新刷。而推思之。則亦不與舊版同可知也。願廿餘年前戲墨。吾豈敢懸念耶。但見賣名之憾。不得無言也。因贅數行於簡端餘楮。

曲亭主人再識

南總里見八代傳第六輯卷之一

東都 曲亭主人編次

第五十二回

兵發山を焼く五彦と走らば  
鬼燐馬を助て西嶺と道導く

再說上野國甘樂郡荒茅山の原に宿道節主後が隠宅の白甘の城兵既小を程遠くを寄ける及びて借平音音の道節小の五大士と延え為す夫婦寄を防留めく戦没せんと奪りて手單節も共侶と死んと決めて五大士は後小必死の覚期ハ皆是忠義の為中志はるを視る餘彼大敵を老夫婦小が禦げがとてしつて柱も死況と申す單節小が怒小退を死と盡るの事と申すゆも大山道節等の命をさす老弱男女を送して脱去するを後々も敵はれ



恥亦これまほきなり。さきさきとくは建は落よとも後たゞも。さきさきとくは亦思念なり。  
 世四郎音音のいふは龍とて。寄はる敵と標け吾們の七八反背の山邊は退れて  
 樹下暗に彼方より不意に起る横はる敵の左右を撃崩さ。這奴は必度を失て  
 躬方子伏兵ありと。當下逃ま。敵兵をよ程追捨く。會共保はる。他郷は  
 避く時と俟は。只今死するは生は。この浅はるを論し。左右を佐と刃入れは  
 信乃莊助現八小文吾等の齊一掌うち鳴りて。説得く理あり。極めく妙あり。敵  
 の足らぬ雜兵を幾人敷捕て死するとも。為階侯の珠をとり。権を弾く異  
 ね。と匹夫の勇い。えう。さ。の。を。と。い。道節悦び。ゆ。ゆ。先。の。奔。走。不。便。ホ。と。と。  
 とく馬より乗して。入。嚮。の。謀。合。せ。と。張。第。の。左。の。右。も。大。田。の。一。と。煩。え。  
 よ。來。去。を。相。謀。ひ。て。姥。雪。夫。婦。り。共。行。徳。へ。お。還。る。と。憑。む。小。文。吾。は  
 ぬ。と。い。わ。る。ぬ。と。い。と。乗。ら。ぬ。と。と。緑。頬。へ。馬。の。鼻。つ。牽。よ。と。曳。の。單。節。と。合

鞍は後ぬるゆと絆りて。あまは林とからま。一町を牽退けて。藪系樹林陰の  
 上も来る敵も。常葉の老夫婦。音音の今ゆ。争ひ難く。焼草と家の  
 内外に積寄せ。投入を案山子。の圓竹弓も。俄頃準備の細竹の征箭。伐盡  
 しく。携りて。宿の。宿。の。障子。を。指。す。の。要。時。は。隠。つ。を。と。い。は。る。と。  
 いそがた必死の覚期。哀れ。斯有。程。道節。信乃。現。八。莊。助。の。背。の。山。邊。は  
 退る。小。文。吾。共。侶。露。深。の。茅。萱。中。に。埋。伏。れ。敵。と。遅。と。候。程。推。寄。來。つ。討  
 ち。の。軍。兵。極。実。の。只。狐。屋。と。稻。府。の。と。捕。卷。て。咄。と。囂。る。声。早。雄。の。兵。卒。ホ。走。入。り  
 と。と。ける。庭。の。折。戸。は。殺。梟。る。三。宝。平。駄。一。が。首。級。を。之。忽。地。鬼。胎。と。抱。け。左。右。を。進  
 ぬ。づ。け。り。當。下。大。將。巨。田。助。友。柴。の。戸。挾。と。馬。乘。駐。を。れ。大。山。道。節。ホ。何。処。ホ。在。る。  
 郷。同。類。の。援。よ。と。不。思。議。の。網。と。漏。と。い。も。一。味。の。奴。原。共。侶。の。此。の。處。を。願。れ。と。い。  
 密。訴。ぬ。と。定。不。知。の。斯。勢。を。と。捕。籠。る。の。助。友。と。認。違。れ。名。告。ら。る。と。も

隘さき徹てつて本もと更さらへ豫よてあつた。かまき窮きゆうるるの身みの命運めい今いまも龍りゆうの鳥とり檻おんの獸しよく真ままか  
 ころし縛ばくの索さく係けい同類どうるいの命いのち時とき冥みやう依よて免めん入いるあ奈な何なにと呼よれども軒けん端たんかま  
 松風しょうふうの外の心こころのさけり助友すけとも焦燥せうそうで塵ちん揚やう蓬ほうた敵てきの逃にげ足あしは武士ぶしの他法たはうのいふごと  
 受うへ益えきの同答どうたう多おほく踏ふ込こみ討捕うちとまると烈はげ下した知し先隊せんたいの雜兵ざへいのけりあると答こた  
 中ちゆうも群ぐんも競まぎ竹たけ縁えんと踏落ふみおつれ先まへを走はり入いると程ほどは箭や来きを護まもる城しろ  
 雪夫ゆきと婦ふが間ま近ぢかく敵てきを引ひく障子せうし隔亮かくりやうの間まより差詰さしづり射やり出でる征箭せいせんの裏うら鉄てつ  
 中ちゆうも先まへ進まり五七ごしち人にん矢庭やにわを貫くわん射倒やされど枕まくらを臥ふせけりこの言勢ことせう  
 辟易へきえき人ひとを小盾せうたは拍揮はつゐく色いろめ敵てきも息いきも吻くちせも隙ひまは弦音げんおんは伴ばん箭や  
 さけれ機はりとたの引板ひいたの鳴子なりこの群雀ぐんせつ稻いの穂ほさ風騒かぜさわださ返かへささるる也なり鮮果せんくわ  
 べうものこれ助友すけとも眼まなこを睜はらしてひひさるるの共ともさしをるるのへ箭や子こ何なにぞ怕おそ  
 るこそあつる退ひくる進すすめと罵ののる声こゑをちりちり箭や面めはなるとい破障やぶせう子こ遣戸や躡しりぞ

放はなち踏推ふみおく擬勢ぎせうも有あ繫けい雜兵ざへいの鉄釘てつてい頭かぶ衝棒しやうぼう十手じゆしゆ得物とくぶつ々々々々ち振ふく  
 ぬさび進む程ほどもあせむ借平せきへい音ね音ねへ既すでまも矢種やしゆも射盡いくつけれいふま  
 薙刀はげ朴刀はくと腋わき夾くわみ抜敵ぬめ物ものの蔭かげより頭あたまれ出でる對たいの身み甲腕かぶでん鎧脚よろひあし看み老木らうぼくの  
 松まつは苗維なほゐ蔓まゆる打うち扮はも子こは代しろ勇氣ぶいきを示し軍いの宏言こうげん夫婦ふうふ齊いっ声せいゆりあつる  
 物々ものものれ捕とまの天勢てんせうれ雜兵ざへいの所ところ要よる大將たいしやうの誰たれを助友すけとも放進はうしんまといふとまを  
 萬夫まんぷも敵てきを死道しどう節せつぬりかたりの寄よりお拍おれて逃にげ隠かくれつあつるねども時ときのいふに至いたる  
 然しかるがごとく我われ兵へいの起おきえ為な同盟どうめいの勇士ゆうしと俱とも今朝けさを名他郷なたがうに赴おもむかふりかへ  
 りれを誰たれとさる大山殿おほやまのどのの譜第ふだいの老童らうどう燒雪やきゆきと四郎しやうらう一名いちめい借平せきへい老妻らうさい音ね音ね共とも  
 侶りはと俟まちと久ひさめられたり討捕うちとてまふ事ことも果はむ細こ今いま雜兵ざへいはさへいり  
 老惚らうぼつホごうるも主まと延のさんとて死しは中ちゆうの夏虫なつむしの火虫ひむし不似ふにる白物しろものの物ものをいせを  
 彼奴かやつも榻捕たたとらむと逃にげまると夏なつ勢せうの誇こほる侶り擬勢ぎせう方かた前まへ后ご左ひだり右みぎ不ふ闘たうを較くらむと競まふと

借平音音の右ふびりふ受流ま刃の牙も覚知のり裡迫り敵を斫仆と電光石火の  
 大刀風ふりも老樹と侮りしれり嵐の木葉武者帯出する外面も助友をむく  
 焦燥く蓬し進めと鞆壺敲るる海線入る後陣の大勢噓れ叫ぶ攻者々々  
 火水まされと接りけられ木石のゆるぬ老夫婦心むり早れどもこれ彼共よる肩ぬ  
 秋の河原の丹楓より八入は流る鮮血のこれるお今いづとせよやん且戦ひ且  
 退りて家よ火を被猛火の中身を焼てんと豫ての覚期も心よめるまのう人  
 曳も單節のゆふもや四犬士共供の隙も落るるをといふえよ若も碎る谷水  
 よるも堀苗々の一ツ勢の刀尖受流し又うけ流を刃の筋とるるをての透を  
 ゆぎける。結鏡分。ゆれへ又道節ハ信乃莊助現ハ小文吾共侶の家を離  
 るるこ八反むる。開戦開るるん時敵の左右を龍共んとて第萱の中埋伏れり  
 且くその圖を俟程は既中と母屋のくす寄りの賜る用の声始は響音しと前叫

大刀音漸々も最も急迫しつゝ時をよけれとて抗て示せ領く突  
 士も彼此も草推分るるや立ちあがり身輕の打扮四人左右も立りしれり樹間  
 直潜れ背門邊より不意を敷んとする程もくとも百歩も過なむといひり  
 る兎岨蔭より頭をさる一隊の軍兵勿心地路を西より先に進み一箇の大將  
 萌葱威の身甲も皂毛織の陣羽折十王頭の脚指も紫紫金作の大刀端長横  
 佩て杖つた声高安も思るる大山道節汝も守りも株を守りもあも奇兵を  
 行ふ軟然とむぎ走るこりやと豫く謀り案も違つて射方の勢も比まへ  
 彼九牛の一毛のく龍共敷んと欲するともいつるのりやせん既小をの機を  
 察したは巨田新六郎助友も在り敵もがらも可惜勇士とありひよけれ  
 さのへ免への先非を悔刃と伏せく降参せの首を續せんを猶惑を攬る  
 虎狼の心を改めぬ此度の決し免れぬといひせも果む道節のひとり真先小

進む向ひく。怒る声とゆり。葎一枚の助友とさるれば。汝も雙言の隻別ると。藪を漏  
 るるの穴。透帳をび本。度とせんむと罵る。さう抜く。ゆも尖く。うち振る。刃の半輪の  
 月。秋氷。秋影。小添。の四大士も亦相副け。共。刃を。見ぬ。ゆり。敷。んと進む。を助友と  
 彼射く。僵せと下知。され。左右。後。許。の精兵。齊。一。弓。と。彎。固。め。切。く。葎。せ。し  
 素。箭。も。怯。ま。ま。さ。う。ぬ。五。大。士。の。打。落。し。破。捨。く。よ。う。や。裏。を。め。ま。よ。け。り。  
 と。ど。の。前。計。合。期。せ。む。今。助。友。を。討。捕。ら。む。と。四。郎。音。音。を。拯。め。よ。由。な。し。自  
 餘。の。端。武。者。小。目。の。被。と。送。み。叫。び。激。く。矢。石。を。犯。む。奮。戦。面。も。揮。む。  
 駈。散。く。ま。死。を。只。一。擧。め。極。め。は。勇。士。の。大。刀。風。四。下。を。拂。く。五。大。士。一。処。に  
 聚。ひ。し。又。五。所。に。立。り。れ。前。に。顯。れ。後。に。隠。れ。く。秘。術。を。竭。む。春。の。汗。は。血。の。涙  
 鹿。の。野。を。浸。し。紅。波。の。看。を。流。ま。ま。く。小。斫。付。され。る。雜。兵。の。死。骸。の。骨。を。乱。さ。る  
 如。く。き。の。み。も。倍。ま。五。大。士。の。ゆ。り。も。烈。し。た。刀。尖。は。崩。れ。立。る。瘡。を。れ。逃。る。助。友。は

推著られて助友さへ疾まると透さむ追撃五大士の背は起は一隊の軍兵  
 中も一人高く叫びて逆賊道節小且く等巨田新六郎助友さへ返せ  
 返せと呼ぶ声小五大士齊一駭きながら後方を信とえくれむら打扮の  
 寄母の大將彼も助友さへも助友面影ゆへよく宵よりそれゆゆ後とせり  
 逃る敵を追捨く近く敵は駈向ふ又引返を己前の助友隊勢を進めく  
 先後より引夾を毛攻りける時小母屋のく不當ましく俄頃よ北獲る猛火の光  
 秋の山風吹暴く火敵飛散り飛程を樹木を焦し草を焼く煙は堪ひ  
 敵も助友も別々なるまも頭の上は降ゆる火華を拂ひゆむく周章大か  
 るるげりけりこの時小も五大士前後の敵小隔られく相距ると百歩二百歩  
 岨のすち在り或は巖の陰小をり火の道せふのまければ輒く聚合し由は  
 れも思ひのむる信義の心鬼天うち仰ぞ嗟嘆よゆ堪む憐むく姥雪夫婦を

今も亦家火を被く共煙とるあけん彼火の故俺們が圍を解くもつら  
 死を脱す時あふ似るも亦是夫婦が忠義よれ然るもその存亡も極め  
 べつた迷憾敵の猛火は度と喪く路の閉けを車ひきれや煙を犯くも  
 母屋のく近へ行く焼迹なりとさまぐりしうはせまうと云云といひ合さる友  
 どのの心意の一致しく踰ぬく攻を求むも風のいしく烈くさう西吹と東よ  
 けの南へ巻て北は旋る音凄く沙磔と飛と山林過半焼つ死勢ひ犯く  
 けの母屋へ赴くこのゆら五犬士在つる伏せ。ひとは聚合ともゆる武尊駿  
 獵の火田單火牛の謀もこれあつてさうまへさやと数百の敵あ怖れさうもあく古を  
 掉め送ふ手と抗意と示す。下圓山をうら踰て煙を避む草木と共に焼をんく  
 とと招け招く繁草葎も風小焼立られて通山路ののみさざ火燄をま  
 ま散乱と彼此とみる犬士ありさう。間を隙を降ぬれば襟袂は燃ゆるを

拂ひ落しう掃滅とも。同生憎は焦熱の地獄の責不異なりまも中道節の  
 火道の樹をみづら非とて今朝も破棄れば甲斐さう。やその樹のりとも  
 身ひら遁れく何せ圍の解けて火小焼も。みる是過世の業報さうと思ひ  
 定めつらく観念の外さう。犬塚信乃がほとり降る火燄の珠ゆらふ  
 マウラければ西時場の堪む右へまき左へ避く身狂へとも心中正しく思ひはく  
 ようのりく要納め村雨の大刀とゆび引抜てちうの限りうち振き刀の奇  
 特件さう。その刀尖より濃水氣の遠く散乱と。百歩二百歩もある道節現ハ  
 莊助ホがやう。閃やく火燄さう。滅され落る。當下信乃の声ゆり立く諸  
 君子これをさう。火急の難義は心まごひこの大刀のを忘れの肩へ見入る  
 向の壁言も似く思さう。この刀をて道芝の火をうち滅く。山を越へ續死あくと  
 呼く。さう。刀をうち揮打ぬらう。山も数るぬ高た奇特の道節ホる復

生り。と勇ましく立。後れて見えぬ小文吾。もく。ゆるるる。の。ま。は。待。間。も。わ。す。め  
山の。夫婦が。戦。没。の。迹。の。煙。と。立。昇。る。名。残。も。有。敷。惜。れ。て。身。の。浮。雲。の。草。枕  
翠。の。甚。麼。る。旅。を。お。ま。と。お。ひ。か。ら。ん。後。方。より。ゆ。り。り。路。を。尋。ね。て。追。蒐。來。つ。る  
三。箇。の。助。友。の。隊。の。軍。兵。百。餘。人。も。あ。く。鎗。を。引。提。て。返。せ。戻。せ。と。呼。お。け。り。  
四。犬。士。を。え。ん。り。り。小。川。の。巨。田。が。輩。郷。高。の。影。武。者。の。奇。兵。を。と。迷。て。敵。を  
と。謀。り。る。智。叡。の。程。の。え。透。し。ゆ。返。ま。と。難。死。の。わ。あ。る。其。処。る。退。と。罵。り。  
跳。蒐。ぐ。披。地。と。敷。の。四。口。の。刃。の。佗。敷。も。先。は。進。み。雜。兵。四。五。名。或。の。鎗。を  
斫。折。られ。或。の。腕。を。敷。落。さ。さ。り。逃。る。と。程。よ。く。追。捨。る。路。を。い。は。ば。懲。ま。す。よ。  
又。む。ろ。と。近。つ。と。追。ひ。ら。返。り。樹。下。蔭。不。知。案。内。の。深。山。路。は。多。勢。と。挑。む。再  
度。の。窮。厄。且。戦。ひ。且。走。る。岨。邊。岐。路。嫌。ひ。む。往。方。定。め。ぬ。四。犬。士。の。別。を。小。文。吾  
け。り。は。程。小。犬。甲。小。文。吾。悌。順。の。裏。小。母。屋。の。餘。炎。よ。り。て。敵。の。圍。を。脱。れ。死

ひとり。む。ろ。と。山。風。の。吹。暴。く。火。敵。満。山。と。焼。ん。と。勢。ひ。寔。は。怕。る。然。る。と  
つ。か。預。り。る。曳。舟。單。節。と。合。鞍。を。棄。て。る。依。り。彼。首。を。樹。蔭。に。馬。を。敷。置  
し。今。ま。の。樹。の。火。の。移。ら。ず。馬。を。喪。つ。て。彼。鞍。壺。の。ま。著。る。姉。妹。も  
亦。い。ふ。と。猛。火。は。必。死。を。脱。る。死。せ。し。ま。し。て。彼。方。へ。火。の。ま。ぎ。移。ら。む。と。覺。る。小  
か。の。火。を。脱。る。と。敵。の。お。小。擒。と。る。後。悔。其。処。ふ。ち。あ。り。し。ゆ。あ。ら。む。と。肚。は  
問。腹。は。合。さ。り。ち。ち。燃。る。小。草。を。踏。越。飛。越。辛。く。そ。の。樹。の。根。を。近。つ。ま。ふ  
前。面。を。あ。ま。の。寄。舟。の。雜。兵。兩。三。名。を。曳。舟。を。見。出。し。て。あ。ら。奇。貨。買。む。と  
敷。置。た。る。馬。の。絆。を取。ん。と。前。後。を。其。処。争。ひ。け。り。ゆ。も。曳。舟。單。節。亦  
多。勢。と。あ。ら。む。敵。の。物。音。母。屋。の。猛。火。は。山。路。の。延。燒。ゆ。て。男。姑。も。故。主。も。亦  
彼。友。人。も。脱。れ。る。や。と。ら。ん。あ。ら。む。巷。ふ。こ。も。ゆ。も。あ。ら。む。と。の。み。だ。も。落。ぬ。為。小  
と。救。ふ。幾。重。の。ゆ。も。著。ら。れ。る。麻。索。の。浅。ま。く。釋。ぬ。ら。む。の。ま。ら。む。

煙は狂ひ樹を遠る馬の頻々嘶なく前脚高く幾遍とま跳揚れはとて鞍  
 安くぬ妖婦只瞑眩に曾流れ吐嗟々々と叫ぶ林のうも軟弱々々と馬より  
 先は疲勞果て心地死ぬべう鞍壺をて休甲あり俯を折く寄の雑兵西三名  
 煙を犯し走り來る馬の絆よと被れ曳る單節の又ゆる不獵場の野鷄の  
 箭よみみ雁鳥は寄るあちしと吐嗟とたりのち共は頭を擡る程のれ小文吾の  
 只飛が如く小走り近づく大喝一声左より立る一箇の敵とばるまんと砍付せ  
 残る兩兵の散驚死る見ぬ大刀を抜擧して前後奔一小文吾と敵を速速く  
 閃りと翻て身を沈ましく外せ狂刃と刃寬の前羽てまも馬の絆と破と斬は  
 断られて馬の同胞と棄せざるまは衝と脱く走る蹄の音高く東をうてを放れ  
 かのく小ふとたりの小駭死んたる小文吾も又この敵の雑兵亦もあるければ今  
 牽駐る暇も房しく撃つぬ二箇の大刀音小文吾のあまゆぬ心類は井可也

まふ奮勇は倍々十倍して又一人を砍倒し高踏せし内ゆるる刀の下ふ残る  
 敵の首の地前小落く軀の仰反付とるもせを放れ馬の迹を暮之追  
 程は荒芽山の麓路の近郊の野武士七名嚮白井の寄る響の関の声を  
 突しより落人を剥畧んとく東の巷小聚合をり浩外は放き馬の西箇の女  
 子を乗し方依りてと馳來ると遙らうちを竊ふ給ひ衆皆前路に立  
 塞りく鉤索竹槍桿棒まどをち合し柵めぐ捕駐んととるし小馬の頻  
 々小嗥狂ひく人をも藩埒をも衝破る勢ひ尋常るるがれ準備勿地相  
 違しと迫つしれの切齒付され或の蹠られ蹂躪られ矢庭は死するもの一兩人半  
 死半生るものも三四人及びりる月をの悪るるの絶え二人のとるのけのれ  
 とも不敵の奴原され一人膺は著りし小筒の鳥銃取あけ火蓋を断る  
 撞と放せしや二十四間隔る馬の肛門のゆるり強梁をわけ打板を



落人を奇  
 貨とく  
 のや  
 野武士等  
 放馬と撃つ





両箇の主と乗る。一は、四足と折て伏せけり。さゆこそわらわを彼女子ホと遊ぬ  
せと鳥銃投捨れ彼槍を引提く走りぬると折ら怪む。両團の陰火  
何処とぬく囚死来く伏する馬の頭の邊に墜首るとする程は馬の勅與と起  
わがりく體戦あり馳るとす。めめ、駛りぬるすくわれどといふ隙は往方も  
あふむるりふけり。有介程小文吾の稍を邊に追蒐來の遙小馬の敷れ  
形勢陰火の奇特も目苜する。只管驚嘆し、馬の往方を知らんとあり。人  
喘なくまき足音の呆れく立する。兩箇の野武士齊一後方を走り、ありは  
彼奴も落人へ馬共侶は追來せ。女代軍は物せぬと其く間も暴奪略忽  
地路を要する。槍と拵く突懸るを。さゆゆりといふと小文吾は左より槍頭を握り  
留引抜く。刀の右より槍の真中丁と依落を本直は駭く野武士は槍投捨て  
左右より利腕を捕て奪と組む。小文吾驍く氣色もる。さゆ左より取る。刀を

銜て立る。依は一推接する。角瓶の秘訣費を拵て揮解れ。徒倚く項を雙のよ  
搔擾を又引よむ。頭と頭と兩二遍撲合さる。地難て苦と叫ぶ。声のろ共  
足空さぬ。差揚て地上へ撞と狗見放。下壁の似る風下へ籠落し。の野武士は  
ゆらゆら。処の累り伏す。石の鼻つら。株は額う。門の夢欲とをり。小昔痛ふ。堪む  
蠢蠢と起んと。さゆと小文吾が。疊鬼の。勢大刀風。一葉の露の玉。挿筒。ゆら  
身とを四と。わらわ。積る。兎悪の。むら。ま。けん。天の。網。七。重。を。風。吹。く。ふ。あ。ま  
天引く。遠煙。百千の。團も。萬。みる。火。宅。を。た。と。悟。る。さ。ゆ。を。知。る。な。を。量。劫。數。盡  
されぬ。煩悩の。俺も。狂。意。馬。心。猿。の。背。の。鞆。と。取。留。て。曳。草。竹。節。が。存。亡。も  
往方も。定め。る。な。ま。よ。か。さ。ゆ。く。憂。る。ふ。身。の。疲。勞。も。さ。草。路。の。秋。草。踏。む。を  
索。七。く。ま。杜。士。が。心。の。誠。比。る。死。犬。と。い。ふ。の。數。十。日。は。近。死。ぬ。み。月。の。筆。を。載。て。ん  
是。仁。惟。義。忠。信。礼。智。孝。悌。を。磨。わ。げ。る。玉。ふ。い。の。れ。い。づ。を。疎。幽。の。さ。り。け。り。

第五十二面

高屋驥は悞順野猪を搏せし  
朝谷村に舩虫古管を贈る

却説犬田小文吾悞順の途に野武士を斫棄しより只管馬の迹を逐て東を  
望み走る程ふその日も佩る暮よけり昨鬼通宵今鳥終日或ハ数百の大敵と  
鏢と削りゆく又幾里の道を行く索る人は遭ぬ憾よし又身もいとけり疲勞  
ありあの何処と里人は言問ふも葉をりり又青の株は死らちぢは獨情  
あり今朝も荒芽山の闘戦は兵火彼山の土毛を焦しく敵の圍の解  
時豫て契りしゆのれは犬山大塚ホの人々ハ山うち越て西の方信濃路へ走る  
けめ然りと放ち馬もあつれ東へ道の程も多るも八九里秋を十里も  
及ぶならんかぢも勞しと功も多し友別れて又ゆふも預りる曳舟單節と  
その甲斐もさく喪ふてよりやこの後道節ホは環の日の退くもとされ又何の

面目のり信の義ある人とせられん嗚呼是非もさ何とせんのをまるとを  
又々瞻仰る天の夕月夜曇る影胸狭く雲ぬ心の迷ひを思ふれと身を  
責めおひへり尋念をなす郷に彼馬の馳たるを野武士の鳥銃を撃たれよ  
いとも怪し光物との月より隕より馬の忽地身を起して復奔うと前如く  
駿足を十倍く往方も知らむるし一件の親子夫婦の義烈を神明  
佛陀の憐れを祐るまのんむん如此有人あけの道もとも恙あらざども  
然とそとびで止まらぬをあらは露宿をせんか還て人か怪りられん一椀の  
糧一夜の宿を求めてとと吐裏の處分既を決りければ樹下でまて一白  
屋の宿投り形を死夜を境けりこれハ又小文吾の次の日ハ旦未明に旅宿を出て  
前路々の或ハ旅客里人ホは馬の往方と外ゆりこれ彼とさ詔る不絶て便  
宜とゆりいづも望を失ひ且疑ひ且咎る只管涉獵の事とさる二日四日

ろりゝゝあるとも知らむ武蔵の浅草寺の程近に高屋阿佐谷の村間なる  
 田圃のほとりと過ると秋の日は短くと下晡まきふけり當下小文吾の笠と斜  
 推挙せむる四下と眺る新堀湯島神田の衆山高く西北に連りて樹木の葉  
 まご染ねども夕日よ移る遠景観く宮戸隅田千住の長流南北の横なり細  
 引の声の喧え終とも早暮の業近村寂り向上を幾群の秋鳥雲入る  
 還るも直下廿千頃の稲田花を合て戦ぐの露の道芝の玉を麻石の菊と  
 敷蔭は金と欺く人音は駭た飛ぶ虫の星とぞ鳴んと欲し宗山子小押く  
 かゝ鹿の圃と暴く餓さるゝるゝ就たあふよろく皆是旅泊断腸の  
 媒るもとりのれる。あの河ひら打渡とる下総國よりく舊里へ  
 遠くは忘れぬ前月廿四日の曉る犬塚ホを送るとく市川も漕  
 出せし一兩日の行きとむひののをあひまき大川が窮厄より只殃危

のと黄縁とけしきと還るるんとりり父もりも姑も、大聖も死虫崎氏も  
 めるべとのちとむとくを待不樂のひけの大八ひの小慰とて益る老の詩  
 言よの房八が縁由人よきられて又さふよろぬのぞ未のせむ親小抱と  
 よるの寔ふある不孝之親戚交遊これ彼と約束の違へる信るは似たり  
 由りてくまきでたつる小翠の夙めく行徳へ還りて情由と報死飲ひ多くこれ  
 影護し曳る單節が往方のまねぬとぞ終中て舊里へ立ちりくと大山  
 るいよのれやせんせとる西二日新婿婦ホを索てもはゆら中山道とち  
 登りて犬山犬塚四箇の友と索と環會人日と絆如此々と報て後親の安否  
 問へき飲ひくこれ四箇の友の再會の日測く。進退谷のぬ死けん馬の再  
 生と奔り奇持の有さくををれとい入るも遭りて危る日を送るりか入  
 なる守るの神も仏も死せ世故とむひつて夏虫のひとりむ宿小帰は

鳥越山の麓に居る。一條路の曠はあまよりの時入相の鐘迫ふ郷音に杜のくさより  
 昏るり。あまよりの人煙の辺はあまよりの道で宿りも求めんとく足の運びをいそがせ宿りもせん  
 れど前面の菅原叢陰より最大なる野猪の身負よりとあはれが忽然と駈出せ  
 る。あまよりの途路傍の右の地蔵を衝倒し木ともいひ草ともいひ當ふ任し  
 啞折く勢ひ虎彪に敵まへく蒼直まをまり来る小文吾吐嗟とどども左右の  
 まま深田へ避難す小便すければあまよりの道を掻投捨て直立逆へ程もあつ  
 せむ野猪の哮と牙を怒り矢庭の掛んとまる丸を小文吾を多く身を翻り  
 野猪の膽礫と蹴る蹴られて怯む氣色もあまよりの弥在ひ倍哮りと稍強向んとする  
 程は小文吾肉りと身を跳らしく背の上あち跨り刀を抜く暇なければ左の野  
 猪の耳を颯と右の拳を鉄器の如く握り固めく眉間のあつたを續ぎあまよりの博りく  
 これあまよりの聊弱丸をる月一身のちちちを究め博り十巻も及びくと死ゆも老

る。あまよりの肩野猪の脳骨砕け目子飛出血嘔と吐て死でける當下小文吾の徐々  
 儼小下立ち死る野猪とよくあまよりの全身まて古木のごとく大なると犢も等しこれ  
 らが年を終ると死をまて松脂を身ま塗りく矢石を防ぐ為まと豫てませま  
 なくあまよりの暴虎馮河の戒を忘れあまよりのねども脱る路免れ禍と免れい現けま  
 カケ益小立るのまて危れたる死とひとりごちる塵ち拂ひ笠とりあげく今宵  
 寝る宿りと求めくいそ程あまよりの丸より一町たりもての路の真中へ仰反し  
 せし男あり。梢光と増き月影小立よりて熟視れば齡の四十餘ある身あま  
 仁田山木綿の裳短る単衣を被て足あ木皮織の脚絆と紐高し結著費あ  
 紅銅造の二尺四五寸許る獵刀を跨へあまよりの長刃の短鎧と握合手するまの鎧へ  
 まま放さくとも氣息の既あまよりの如く當下小文吾あまよりの近村の獵戸るま  
 百姓の悍然のあまよりの彼野猪を刺んとせよ刺損く度を生ひ立地は掛らまそ息



八天傳六軍卷一

九  
角泉堂

八天傳六軍卷一

九  
角泉堂

絶つたあざのんむらん幸ひよとせぬ負ぬよとせぬ生るゝものゝしうれ角舩を好  
 るふ素より撲傷の奇菜をとり撲れて氣絶せしめふりまき即功のをりく  
 一日うとも身をもさるる舊里を出る日もを懐きあつて失ひぬ今も海あらん  
 用ひくをなやと速く行袱を解披をくわちとちと素より小件の菜のきりけり捨  
 服紗の内ありとそ又肌巻の財布ととうき端引揚て揮ひ出せし嚮ふ登崎  
 十一郎重見殿の貳禄とく強き贈り一十包二十兩の沙金の先滾々と  
 出へくこれを取て管笠を仰さぬよと入措たるゆゑび財布とち揮ふ果  
 しく件の奇菜も出りのそをよれね小撮取り七踏仆る彼男の口の中は入れをばる小  
 齒といふ咬締て用へうものざれと腋挿の刀小附る筈を抜とりてややく  
 口を推開く菜を送りまき哺ら懐帑を推圓めく臂近る田の水小浸し  
 口中小紋り入れ菜を胃中へ推下して喰んとするふその名を知らね只喃々と呼

活る小且しく件の男の苦と嘔吐て眼を瞬ち死鎗とり直し刃を起して忽地走の  
 去るんとする小文吾急は抱た縮めくやよ俟ぬいふことありこれの旅もくれば  
 和殿の殘仆らとえ過まよゆ忍ね首様々々小抱せし甦生せれて本意は稱  
 へりありて和殿の老る野猪は掛られし小のさるやこれ亦彼方めく如此々々の野  
 猪のゆひぬ然れとも怪我の功名を辛し七撃鎗を疑ふ共侶は誘ひ死せぬ  
 とのりて抜馬く件の男の鎗投捨て跪坐た原來おん刃の再生の恩人ゆてせし  
 既し賢察せらるる如く某も先の程野猪の小鎗著しれども胸所を必外しけん  
 忽地鎗を振解れ勢力ひ當るものねの逃んとせしそれさう愧れも果敢る牙  
 掛られて空さへは投らるるといひ後東西をも覚むめて今かうなぐりれば返り  
 より又のや野猪は掛られんうとそえあふとく狼狽し鳴呼と名いん今更し面目も  
 る免趣舎之刺苗のひ彼野猪の何処あるいと向を小文吾うち領た遠くものぞ

誘ふといひは後方より来て心死けん邊く砂金と取らぬ財布を藏めて  
 腹を巻締又一色の行状を肩より被て先より立ゆ程西へ距る三町  
 許只一條の田中の路の野猪を斃れてあり件の男の死をまじく駭れ  
 且歎びて遠く小文吾がほろおはぬ額とつたこの野猪の死に  
 身ひらひの幸ひも阿依谷高屋の村人がまじくあつた洪福之抑この野猪は何  
 処より移り来よけん鳥越山のやうな夜とる日とるに來ると草を掘り圃を  
 暴きと損毛大くうらうこれが莊客們商量して獵夫を傭ひてら敷を捕せん  
 とあれどもいと年ぬらる猛獸これの前も鳥銃の丸も徹らざこれより村長の  
 沙汰とて件の野猪を斃ゆればの二三貫文の辛苦銭を取せんと徇られり  
 某の阿依谷の民ゆく鷗尻の並四郎と呼ぶれば昔里不在り比山獵と交  
 とくさふをちの些をうらうをぬるよもぬればそれの野猪を斃る魚で

抑うれいの七 村の患と除く辛苦銭をも獲むやとてこの日ごろ彼此と猪徑をよくん  
 おの昨夕より寛済せその甲斐も早く早まよければ還ていま掛られて命も  
 既ふ危うの毛を吹死疵を求めり然るに身力の助力よりて命を拾ひ  
 のまらる二三貫文も空しくも且肉を鬻ぎ皮を售らば一貫文の又ゆべりか  
 まの四貫の徳あると皆是れおん刃の賜のりさられ疑ひなるふあねとも今  
 亦この野猪をよくするふをため某が刺被る瘡傷の外は疵をいぢりゆるる  
 術の七轆く殺しぬひるさうらゆらゆと問ふて小文吾うち微笑を否けれ  
 ととも術のりも肩野猪の癖を口管狂て疲労れと死辛く斃る殺  
 せのぞを疑ふとこのひ晴ゆけりけり枝も力も推隠まをとらあせして  
 並四郎も何々とうち笑ひ入ぬ事あり不幸あり狗骨折る鷹が捉る諺も似  
 うけりせらまされかむあれとらうげ水恩と稟する某今宵のお宿を仕らんぬ知

口れむや大約廣澤淺草よりこゝへ戸金曾木阿佐谷高屋千束の村々  
みる石濱る千葉殿の米邑を分敵より同者の用心とく他郷の人を留め  
とむつた他法あり況く獨行を宿まるとのゆゑせめての御恩報  
と村長より告ぐ某相計らんと障りゆゑもゆれば扱めんと何國より  
何國へ通るせめてやん名告せんと懇懇と問れて小文吾一談及はむ吾侪が  
故郷へ下総ゆく大田小文吾とゆゑの此度上毛へ赴たゞるは後才女同胞と  
相伴ひ合鞍に乗せしむ折を馬放れて往方とあらむ渠ホも逢人跡と  
追ひく末つれものも便宜とゆゑ現獨行とゆゑの里でも惣じて勇の  
あつねともさまで緊くは法度あるあらとあつね日の暮る宿投宿とく難美  
るうんを和殿は遭へ他生の縁をば一宿を憑きつといふは於大進四郎そのと  
見易なる人とする管待をあらけれ女中の往方と近郷中向定めぬとそ一日

逗留あつても阪のまゝ進むまをひとあつね直宿所まで伴ひ  
なんとせともいつせん今宵この休みの野指とち捨て置る根や腹せられん  
某この獲物を村長許引揃ぬとこれらのもかん分のりも告て述よりまほへ  
この暇をゆだねて鳥越山の根より東北へ三四町赴たぬ阿佐谷の村盡丸る  
東のこのいと大なる榎樹の根よりふとちひまると幹浄房ありの耶まう宿  
苗も火船虫との女房ひとりありあつね如此と告め拒むるゆゑねども倘  
疑ふ不便るんこれゆゑあつねと辭せりく説示り腰に著る燧代杖を  
そを休とりて遞りまゝる小文吾の好意のよろこびを述て立別れ阿佐谷を  
望み赴くまひより路の近くてす小違ひを村盡丸る榎樹の根より幹浄  
房の裏面より燈火の光幽々洩るるありと立ちあて折戸を敲たて呼門  
誰ぞと応て指燭を兼てゆく折戸をゆくゆくのこれ則別人を並四郎が



妻船虫之小文吾の先り名を告ぐ縁頼一虎うち拭きて並四郎が野猪のと  
 今宵の宿りと許され縛の趣如此々々とその大くを告知しと燧袋を平と  
 足まれば船虫の咄く毎よ或の敬罵れ或の執びをいひけりもされば恩もせはる  
 るれ齋小ける野猪ののむる死所ぬぞと禁めりども聴て命の危りりを  
 救ひひり人さるるがごとくが為の中も城隍神先をささぐ又登らせぬと心願て  
 忙しく鹽温湯を汲てまの草鞋と解して足を濯ぎ座席は行燈引提  
 来て小文吾と上座を推さぬ今朝の里を起るのくを里末のひる俗よ  
 の盆の後前とて残る暑の儘に死すその疲労のひけり行水の湯も沸くと  
 休らひるへ許の蚊の名とて刺さる迹の瘡もあるよお管待の蚊遣火  
 のこ此懸懸とも怖るるといひけり大なる素焼の火盆と竹縁のほとり措く

團扇のての死立く鹿朶折せ黒て又遽く刃を起し小文吾は浴させ  
 ち夕饌を差する管待態の精悍く團扇を取て小文吾をうち扇送り  
 給仕とて果の中酒の盃の鯉の烹鮎取添て器物さ鄙るる鄙るるに宿  
 るる女わらふ小文吾の言葉さくる款待のよろこびと述るの口づくと四下と  
 るるふあの一間の外は物もく席薦の六枚をり布の上座の唐紙張の袋  
 との小棚の紫竹の押縁ある段躰天井の不破の関屋の廂ると月の漏る  
 べ死住ひよのぬとびるるれが出居のくは壁に尺をりりる落頼れ骨もるく  
 るるる依よのさるり戸を推被て塞だりこの次の間の庵漏るる別は夜物弄を  
 する納戸の丸の其処は夫婦の睡るるる又この女房船虫の年歳も二十の  
 う人をあらせめやまのぬくくん抱のひひま進止まきとる男めたるがはましく容  
 白の醜きものむ頭髻の堅さるる結紮ね櫛の横さるる挿光しくとく

釵を抜出し額髪を掻く癖あり男帯のゆるるを腋下は結垂ても禪の綺  
 羅穿ぬる単衣の袖も身幅もいと廣く長き良人よ貸て被せん為状近代  
 被る秋るる小文吾をこれらより腹裏あひあひのわづらひが為体百姓  
 らる商人も抑亦何をて生活はまるらん。侠客の類も表彦道も  
 欺くとの博徒の煉るる金銭をとりぬる宿を取りぬるを竊は困て盗り受たる  
 對ひをるる心苦しののろろをたれかかぬの苗もる人妻とち  
 のこで飲ざりしと船虫が云々と浮上るを許さば己をぬき一度過らるる  
 推辞てぬび受もとるる更閑て夜のなまの比より一船虫もこのこと  
 とと挑子も膳もとり納めり且しと納戸より懶推してさるる喃か客並四郎も  
 還るねど今宵えの二更の撞むるに臥草を儲る人些何方もあせせぬ  
 りよと小文吾のむむの懶はるる俵置あつたのむるる臥房も入るる

影護た所あり月且く俵んのと推辞ハ船虫微笑さるる物も死刀祢を  
 のる並四郎ハかの野猪の賞然と得るる友達さるるち聚合る酒飲  
 曉も測るる然らざる夜提はさるる夜も俵せぬの要る  
 所はるるいととて近江木綿のみのぬる寝物語は敵もる小横  
 披たる木枕の盧生が夢を一炊のあらぬゆる懶の色色紙當る菅薦の十  
 府もるる六布七布足る釣緒は下締の細細解て結び垂兩戸縹々  
 障子を圍て燈心減らし行燈の懶を隔の枕上もるる休らぬと告辞  
 出居る紙戸をを立籠て庵溜のう退出たりる程は小文吾ハ  
 行包も二腰の刀も枕も引著る躬て懶あつたを蚤責られ蚊も叫れて  
 睡るるるるも移れぬ船虫もを納戸入りて熟睡や春人音もせむ  
 庭に聚るる虫の声障子は響音る竊虫の生憎は耳みつきの親の友の

曳の單筋を引被て寝るもあらず目睡けん曾ち騷々敷馬た覚れば  
 怪む行燈の灯の滅て定りぬえねも出居の壁の顔は推當戸の  
 失くそら人のをが如く原來盜賊とぞ言れども此も騒々まき睡  
 まり中より七横の衣衾より窺ふ果しと彼首人のりていまま裡面入るる  
 けり當下小文吾と奪う今宵のものをと幸は獨行と悔りて殺し物と畧  
 らんと欲伎倆の程のたれり要せぬと深念と先枕方る腋挿の  
 刃を奪り擽取て竊は帳を穿と横の下中行包を引入れて故の如く人の臥る  
 中より息とを籠り志づる跡を代衣戸棚の向より壁を倚せ伏躑まき  
 猶も動靜とを規ひたり程は偷見の件の壁の破隙より入るとそと又退  
 退たてり又進むがう數回狐疑りなむや進むりて又張を半晌たり疲

勞て実よ熟睡をりたまはるると思ひ決めけん忽地直躬と立ち速く日光りと  
 抜る刃の雷母燭の釣緒と断落り登りて小横の上より彼行包とを  
 刺す刃の光を目當る小文吾透さず跳躑て抜く鋭く丁と研る刃の下  
 偷見の首の礮と落りける當下小文吾声高きと内方起出ぬれ偷見と  
 撃ち出す指燭とを奪ひて舟中へ忘口隠る声の響りぬ狼狽  
 なる状でもあらず小文吾頻りに焦燥て内へ恐れ惑ひぬる賊を既に撃ち出  
 たりや燈火をとくと志をく喝れて登りて行燈引提て走り來り出居の紙戸  
 推開きし燈の光は小文吾の撃ち落りて彼偷見の首とを是則別人の  
 らぬや並四郎をりければあつくりと呆れてぬるび辭を吐きぬる拱  
 らぬうち目成る噴息の外きりけりゆれば又船中へ行燈側より置いて只潜然とち  
 泣きを奪うぬくひえり頭を擽て目を拭ひ喃か客人犬田ぬりと奪りて入るる



船心



小文吾

侍れども怨も感も命の親も。おん身の寝頭と搔んと計りて天罰覲面を報ひ  
まを還ておん身は敷かれしよせめてもの罪滅しうめいとつひひはらひ返せ  
ころは似れどもころがあらむより。村長でゆりて三代前の祖の時身上い  
衰く日地も過半枯却り村の役義も人譲りて水飲まりゆりてとも。田農  
業の棄るまより。親は男児さひれこの並四郎と塔中らつくねも。二親の  
世よる人とりし。本性ゆるる良人の放蕩酒と賭とよ。舊川水も田地  
田圃みる没却り生活もよもされけり。夜傾のこれ彼とりて。耳も  
目よめる日もゆりて。口説の諫れり。折る先非を悔てある。白の糠は  
釘きぬまの志も。疎まるとの。おん任せぬ女子の悲し。おんもの  
直らん。秋と暮る。憑む久後の。つと。知るぬ月と日と。けさを送りゆりて。子  
つこの比も。ぬえ。並四郎の。潜る。北門の。つと。り。あ。おん身は。夥の。沙金。あ。つと。

耳に告るよ。つと。めて。知るぬ。これ。受る。恩。ある。人を。殺して。金を。畧。人と。逆。心。の  
あ。つと。の。神。さ。ぬ。身。の。ゆ。も。あ。つと。心。緩。と。敷。妙。の。枕。さ。つと。睡。り。一。回。は。竊。小。臥。  
房。を。脱。出。る。事。の。あ。つと。及。つと。ん。面。目。も。や。と。今。さ。つと。返。る。て。を。繰。返。す。涙。の  
隴。の。い。と。せ。めて。心。細。げ。は。泣。沈。ぬ。小。文。吾。も。亦。嗟。嘆。堪。む。が。つと。つと。の。薄。命。  
歎。な。殊。さ。つと。理。り。も。れ。も。今。の。つと。遍。悔。む。も。甲。斐。る。村。長。は。報。領。主。は。訴。へ。地  
方。の。法。は。任。され。よ。と。い。は。船。虫。涙。を。収。め。く。を。勿。論。の。ひ。も。つと。つと。か。ひ。ら。の。願。の。り。  
家の。先祖。の。鎌。倉。の。北。條。家の。おん。時。は。名。の。武。士。は。ゆ。り。と。を。その。後。子。孫。を。零。  
落。く。百。姓。ま。つと。ゆ。り。と。の。近。死。世。ま。つと。この。地方。の。村。長。で。ゆ。り。と。血。脈。も。あ。ら。招。塔。の。  
個。の。並。四。郎。が。故。を。り。て。先祖。の。名。さ。つと。汚。され。いと。朽。を。く。ゆ。り。と。おん。身。の。心。ひ。ら。  
り。今。宵。の。目。を。人。よ。ま。つと。ま。つと。翌。の。風。め。く。この。地方。を。立。放。れ。て。あ。つと。外。へ。洩。る。り。も  
る。天。明。ぬ。程。は。菩。提。所。を。よ。く。あ。つと。ら。て。村。中。へ。頭。死。と。告。ぐ。棺。と。あ。つと。悪。人。され。も

可夫るもの。其の後の後まで悪名を世に誦するも本意あるが如くするが。  
 二つから頭髪を剪捨て仕立てたる親良人の菩提を吊り、早晚は身の業因も  
 減ざり。これらのよりを許して許しめたる善根も悪く報へた許さ  
 ぬと死口説くと小文吾は頭を傾け親子の為隠し子の亦親の為隠し  
 直死とわづらうその中よりとす。聖の教のよも知らねど先祖の爲良人の  
 悪をせよ知らせと願うの現るおびる心操落涙まゝ感心せり。われん  
 並四郎が亡骸の行包を刺し妻を奪うるを証入るも願ひを聴くと  
 いひく。これの素より人を奪いと忙々死旅をまされこれの許はひらひ  
 日と費人の便たる。香華院は兼引もとも相計ひぬといふ。船虫うれ  
 一げは小文吾を伏拜せぬ。恩を稟る未明はゆゑぬ。何の日も報ひを  
 せまき。これも本意あるが如く。先祖相傳の尺八のゆる。並四郎の度

售らんとし。推禁る家。下壇は秘をせぬ。われを進せ先商  
 せ。ひらけ。納戸の。古金禰の代。納る。笛推乃末。小文吾が。ゆ  
 さうあまを。受とり。幼解ひ。是れ。寔は古物と。わづ。長一尺八分。なり。黒  
 漆。棹。巻。吹。わ。ね。の。わ。の。音。つ。れ。秋。の。山。里。の。一。首。の。歌。を  
 高時繪。小文吾。つ。これ。を。尺八。を。好。む。也。  
 虚。僧。尺八。長。一尺八寸。の。笛。亦。異。一。尺八分。と。尺八。の。必。古。代。の  
 一。郎。切。四。五。百。年。の。物。る。贈。ら。う。と。受。ら。れ。且。旅。は。  
 此。の。物。も。荷。の。倍。ま。の。難。美。是。の。依。收。め。返。ま。を。取。頭。を。推  
 辞。め。の。物。腰。も。包。の中。ま。何。程。の。程。の。推。推  
 恩。美。の。恩。人。の。重。情。一。品。の。蔵。め。も。讓。人。と。も。子。も。な。り。これ。を  
 受。ら。れ。今。さ。心。安。ら。げ。柱。を。叩。け。と。叩。け。と。薦。め。已。ね。小。文。吾。終。

大傳二、輯卷一 三十一 涌泉堂藏

推辞多てあつて再會せし日まであつたの供に預りあつたといふは船虫飲ひてかくくして  
 疑ひの雲芥て心もあつたといふ寺へ走りて来たこの亡骸といふせん棺を買ふまで  
 片隅へあせてお措んとおを掛れば小文吾も亦身を起して死骸を扛て壁際へよせ  
 蒲團をもち被さるゝ行色を引解て件の笛を袂に巻こめて又中結を絡て備さう  
 をきけり。を同じ船虫の裳引揚邊へ緩々帯を締むり小窓細め推開て天を  
 眺て礮と雷鳴を客星の光の高るる暖る虫尚程のゆる菩提所すて十町は足らぬ  
 彼処で時を寝まとも天明鳥の鳴く比虫遅くも還るゆるし曉るる珠さう申夜より  
 蚊の多くて脛で捨る程のゆるゆるのゆるゆる有るひきく血塗れといふがせえ蚊遣火盆の  
 彼首より鹿角もゆるゆる焚火で燻ぬといふは背門のゆるゆる衝と出て菩提所へと  
 走のけり畢竟船虫のゆるゆるのゆるゆる又いふ物語の其ら次の巻を解分せんと知らん  
 里見八犬傳第六輯卷之一終

六編六巻之六

清長院

